

こまざわ 経済 通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1-23-1



経済学部同窓会通信 学部長挨拶 「経済学部と会計プロクラス」

代田 純(教授、金融論担当、2002年就任)

経済学部で会計プロクラスを開設して11年目となった。会計プロクラスの特徴としては、①公認会計士、税理士合格を目指す、専門学校大原学園との提携クラスである、②受講学生は経済学部でゼミを選択する際に、ゼミではなく、会計プロクラスを選択する、③大原学園の校舎に通い、大原学園で授業を受ける、④大原学園での授業で一定の成績を修め、それに関わるレポートの提出により、駒澤大学経済学部の履修単位として認定する、⑤受講学生は駒澤大学の学費以外に、割引された学費を大原学園に支払う。

11期生は現在、2年生であるが、開設以来、在学中の公認会計士合格者が3名、卒業後の公認会計士合格者が4名でている。また公認会計士試験短答式合格者は延べ18名、在学中の税理士科目合格(2科目)者は延べ7名、同(1科目)者は同じく4名となっている。したがって、経済学部の会計プロクラスは一定の成果をあげてきたと言える。

もともと、他大学では、10年ほど前に、会計大学院(アカウンティングスクール)を開設する動きがあったが、本学経済学部では会計大学院ではなく、会計プロクラスという選択をした。会計大学院では、財政面で将来的に不安があったため、である。近年、他大学で会計大学院閉鎖の動きがあるが、本学経済学部の判断は正しかった、と言える。

他方、経済学部を志願する高校生の間では、会計プロクラスへの関心が高い。7月15～16日、8月4～5日とオープンキャンパスを実施したが、個別相談コーナーでは、会計プロクラスに関する質問が目立った。商業高校に在学し、簿記関係の資格を取得している高校生を中心に、自己推薦入試と会計プロクラスに関する質問が多く寄せられた。

経済学部の自己推薦入試は、総合評価型と特性評価型がある。総合評価型は調査書、志望理由書、小論文、面接で判定する。一方、特性評価型は、調査書、志望理由書、面接は同じであるが、全商や日商の簿記資格等(この他、英検等も含まれる)が問われる。このため、簿記資格を取得している高校生は、自己推薦入試(特性評価型)で入学し、会計プロクラスに進み、公認会計士や税理士を目指すことになる。

現在、この会計プロクラスに、奨学金制度を創設することを検討している。同窓会にも、御支援を賜りたいと考えている。

「第4回学生シンポジウム」にご参加を

本年度も学生シンポジウムを開催いたします。

現役生の日頃の研究成果をご覧ください。

2018年11月11日(日)13時～ 駒沢キャンパス3号館(種月館)にて

有井行夫先生を偲ぶ

「有井行夫先生の理論的遺産」

明石英人（准教授、社会経済学担当、2014年就任）

2018年3月22日、有井行夫先生が逝去された。本学経済学部にて41年間お勤めになり、研究・教育に膨大なエネルギーを注いでこられた先生は、病気療養のために2017年3月に退職されたが、そのあとあまりにも早く旅立たれてしまった。

6月24日、深沢キャンパス洋館ホールで先生を偲ぶ会が執り行なわれ、学内外から約50名の出席者があった。多くの方々にスピーチしていただいたが、そのなかで、「有井先生の理論に懸命についていこうと努力したが、とにかく難しかった」という声が多かったように思う。私にとっても有井先生の業績はとてつもなく巨大であり、先生の強靱な論理的思考力に圧倒されるばかりであった。先生の学問的遺産を継承していくことは、決して簡単なことではないが、ここでは、先生の根本的な問題関心を皆様と共有させていただきたい。

有井先生は、マルクス理論の要である、「労働を基礎とした社会把握」を徹底的に突き詰めたうえで、近代的な社会認識をトータルに批判した。社会システムの編成原理は、生産という人間活動から発生している。まずは、その点に理論的出発点を定めなければならない。資本主義的生産様式においては、自然発生的な社会的分業のもとで私的労働が営まれている。そこで必然的に生じる物象化は、商品や貨幣というモノが主役となり人々はそれらの運動の担い手として行為せざるをえないという事態をもたらす。それにもかかわらず、人々はどのようにして主観的には自由な行為主体として日常生活を送ることができるのか。そこでのカギとなるのが近代的な所有権のあり方である。それは、権利主体の意志が能動的に社会を編成するという外面的な把握を可能にする。「法学的幻想」と先生が呼ぶ、この社会把握は、有機的な社会システムから行為主体を切り離す。具体的に労働することを通じて社会システムを不断に再生産する諸個人を、抽象的でアトミックな所有主体としての諸個人へと矮小化する。また、それは、社会をたんなる諸現象の相関としての観察対象にしてしまうことにも通じている。近現代人のこうした視座は、主観的自由を保持させうる、認識上の「変換装置」なのである。主流派の経済学はもちろん、マルクス経済学者の多数派も、この抽象的な主客二元論の枠組みにはまりこんでいる。以上が有井先生の基本的スタンスであろう。先生の有名な「株式会社論」は、「所有と機能の分離」という事態に際して、「変換装置」の呪縛を克服できているかどうかを判定する「リトマス試験紙」なのであった。

有井先生は「自己了解」のために、あえてこうしたスケールの大きなマルクス研究に打ち込んでこられた。近代社会システムの自己生成と崩壊の論理を完璧に解き明かすことに挑んでおられた。「明石君は相変わらずしっかり読んでいないね」と天国の有井先生に言われていそうだが、先生の学問的矜持に少しでも近づけるよう精進していきたい。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

卒業生シリーズ

「ユニバーサルデザインで よみがえれニッポン！」

安藤千賀（経済学部商学科卒）



世界の中で最も少子高齢化が進む日本は、そうした社会にあっても国民が充実した良い生活を送れる手本を示す必要があります。行政に頼りすぎた生活を反省し、地域社会の一員として自分達のことは自ら決めて実行するという、新たな形のコミュニティを醸成するために、私はユニバーサルデザイン(以下UD)を提唱しています。

UDとバリアフリーはしばしば混同されます。一つのホールを例にとれば、車椅子で入れなかったホールの一部を車椅子でも使えるようにすることがバリアフリー。一方、UDは新しいホールを建設する際に予めどの椅子でも車椅子が使えるように設計するという考え方。バリアフリーはこれまでの差別的社会的臨床的改善措置、UDは障害者や高齢者を含めたあらゆる人々が平等に過ごせる社会を目指して、そのあり方や考え方を変えてしまおうという概念なのです。

そこで大切なのは「相手の立場を考える」こと。1990年代半ば、改革を目指した知事や市長もそうした考え方に賛同し、施設などのハード面だけでなく、市民へのサービスというソフト面でもUDを心がけるようになりました。ソフト面でのUDのキーワードは「対話と参加」。市民の立場を理解したまちづくりには「対話」が不可欠。「サービスをしてやっている」という意識が行政の根底にある限り満足のいくようなものにはならないし、市民は権利を主張しつつも責任ある参加(活動)をしなければなりません。もし市民が消極的な姿勢ならば、行政は市民の考えを蔑ろにし、行政のやりやすいようにまちづくりを進めてしまいます。

市民は積極的に主張し、提案し、そしてより良い社会の実現のために自ら参加(活動)する。UDは本当の意味での民主主義社会に導いてくれると思います。

地域で活動する人々に焦点をあて、急がず慌てず、じっくりと新しい社会秩序を作り上げること。その結果として私たちが目指す社会が築かれるのではないのでしょうか。

参考：安藤千賀著「UD社会～3・11が問いかけるもの～」

リベルタ出版





研究室訪問シリーズ



小倉 将志郎
(教授、アメリカ経済論
担当、2017年就任)

同窓会の皆さまには平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

アメリカ経済論の担当者として、2017年4月に着任いたしました。前任校から縁あって駒澤大学に移ってきておおよそ一年半が経ちましたが、都心とは思えない緑豊かな駒沢公園に隣接するキャンパスで、全国から集まった個性豊かな学生たちと、いつも温かく接して下さる同僚の先生方・事務の皆さんに囲まれ、非常に恵まれた環境の下で研究・教育活動を行っていることを日々幸せに感じております。

担当授業の内容について少しだけ紹介させていただきます。学部では、前期に「現代アメリカ経済論 a」、後期に「現代アメリカ経済論 b」を開講しています。まず「a」では、「アメリカ経済の現状把握」をテーマに設定し、特にアメリカの重要産業に焦点を当てて見ていきます。具体的には、製造業(自動車産業、鉄鋼業、電機産業)、エネルギー産業、金融業、運輸業、情報通信産業、軍需産業、レジャー産業、農業、バイオ産業などを個別に採りあげ、それらが現在、アメリカ経済及び世界経済においてどの程度の地位を占めているか、近年どのような環境に置かれつつあるか、どのような特徴、強みを持ち、その基礎にあるビジネスモデルは何か、経済諸政策はどのような影響を与えているか、といった点を説明しています。それら主要産業に加え、社会保障や労働市場の現状といったアメリカの社会政策的側面についても簡単に説明しますが、そこでも産業(たとえば保険業や人材派遣業)とのリンクの認識が重要になります。

次に「b」では、「現代経済社会の特性・変化とアメリカ経済の関係性の把握」をテーマに設定し、より「大きな視点」と「歴史的な視点」に立って、特に1980年代以降のアメリカ経済の展開を見ていきます。具体的には、同時期にアメリカを中心とする先進諸国で一様に進展しつつある経済社会の重要な変化として、「グローバル化」、「金融化」、「サービス化(産業構造の高度化)」、「情報化」の四つに焦点を当てます。そのうえで、それらがアメリカでどのように展開しているか、それらの進展が経済社会にどのような意味を持つか、他国に対してはどのような影響を与えているか、などを説明します。最後にそれらが、アメリカが現在抱えているとされる諸問題(広がる経済格差、政治不信、ポピュリズム、排外主義、保護主義など)とどのような関係を持っているかについて考えます。

本授業は広義の外国研究に分類される科目ですが、外国研究は、対象国への関心を事前に行った少数の学生を除くと、多くの学生にとってそれほど身近に感じられる分野ではありません。彼らが「遠い異国で生じている自分たちとは関係ない出来事」という認識を抱いていることはよく理解できます。その中で、より関心を持ち、理解を深めてもらうために、どんな授業を展開していくべきなのか?説明の際に日本との関係性や相違点を強調したり、アップル社やグーグル社など学生も知っている個別企業にできるだけ言及したり…といろいろと試みておりますが、なかなか自分にとっての最適解が見つからず、悪戦苦闘中です。

そうした試みの一環でもありますが、授業では、随所で学生に「自分で考えること」を求めています。毎回の授業では、アメリカ経済の諸側面についてデータなどを用いて事実認識を行うとともに、それに関わる重要な論点を提示し、代表的な議論を紹介します。その際、結論を出したり、教員の考えを述べるといったことはできるだけ抑え、考えるための素材提供に徹することを心掛けています。

その点は、演習でも同じです。ゼミ生に対しては、まず何を勉強したいか(すべきか)を自分たちで決めてもらうことから始め、輪読する文献が決まればそれについての問題の所在(論点)を報告者だけでなく全員に毎回考えてきてもらい、ゼミの場ではそれらに関して各自が考えていることをぶつけ合ってもらっています。



この「自分で考える」ということは、検索エンジンやソーシャルメディアなどを使って、簡単に他人の(時に極端に単純化された)意見を参照することに良くも悪くも慣れてきている学生にとっては、なかなか面倒な作業かもしれません。一方で、考えるプロセスを通じて、対象をより身近に感じて関心・認識が深まるだけでなく、多面的・重層的な思考力を身に付けることにもつながっていくものと期待しています。思考力というのは人間のもっとも本質的な能力の一つであり、情報過多の現代世界においてその質的な重要性はますます高まる一方、それは人工知能がいくら発展しても容易には代替されえないと考えているからです。

ゼミ紹介

館ゼミ

館 健太郎 (教授、産業組織論、2007年就任)

私はミクロ経済学、とりわけゲーム理論と産業組織論を専攻しており、ゼミにおいてもこれらを中心に学習しています。ゲーム理論は人々の駆け引きを分析することを目的とした研究分野です。ここでいうゲームとは、スポーツやトランプなどの娯楽はもちろん、私たちの日常生活や企業活動のなかで起きているさまざまな駆け引きを総称したもので、政治や経済の幅広い分野に応用されています。一方、産業組織論は製造業をはじめとする個別産業での企業間の競争や協調関係を分析する学問ですが、ゲーム理論は産業組織論を学習するための道具としての役割を果たすため、両者は密接な関わりを持っています。

ゼミでは各学年15人前後の学生が活動しています。2年次にまずゲーム理論について集中的に学習しています。駆け引きの感覚を体感するためにグループで市場競争の机上演習を行ったり、オークションの実験を行ったりすることもあります。勝負事となるといつもにも増して大いに盛り上がります。3年次になると、実際の業界の調査・研究に挑戦し、業界を一つ選んでグループ研究を行います。研究成果は、毎年学年合同で開催する8～9月のゼミ合宿や12月のゼミ発表会で発表しています。ゼミ合宿は3年生に企画・運営してもらって湯河原や伊豆半島など関東近辺に1泊2日の小旅行に出かけています。宿泊部屋で夜遅くまで熱心に語り合っている学生もいるようです。4年次になると、それまでのゼミ活動の経験を活かしながら、自由にテーマを見つけて卒業研究として仕上げます。

卒業生は民間企業を中心にさまざまな分野で活躍していますが、たまに卒業生の結婚式や有志の同窓会に参加させてもらうことがあり、普段もっぱら大学で過ごしている私にとっては、こうした機会に卒業生の活躍する姿を見られるとともに、仕事の話や聞けることはとても嬉しく、勉強になっています。



名誉教授シリーズ

「退職後の一つの形」

徳永俊明



数か月前にある古い映画を見て、原作をたしかめたくなくて読んで、今ちょうど10回目をたのしんでいます。

在職中は、好きな小説も勤めのすき間、とくに電車の中を狙うしかありませんでした。そして、急いでたくさん読むという形になりがちでした。

いただいた退職後は、1日10数時間が自由時間です。すばらしい小説をなにも駆け足で読みとばす必要はありません。ゆっくり、何回でもたのしみます。

展覧会で目にとまった絵の前へ2度、3度と戻って眺めるように、気に入った小説は以前のように“読んだ”という手続きで終わるのではなく、くり返したのしむことができます。

たのしいことをくり返したのしむことができるのが退職後です。

たのしめるのはくり返しだけではありません。いつも“今”をたのしめます。

1分あれば数行を、5分あれば1ページを読めます。数行で1分をたのしむ、1ページで5分をたのしむ——その薄い文庫本を手にする1分、5分がうれしい。

1分がある、10分は1分×10、1時間あれば5分×12……これを実感できます。

わずかな時間を大事にすることができるのも退職後です。

中学時代からのカメラは60分の1秒=1コマ、おととしからの山歩きはやさしい先輩たちのリードで1分=ゆっくり10数歩、友人たちとの語らいは1分=愛……。

“1分”を少しでも多くいただけるようお願いしながら、この世界を少しでも高いところから、少しでも広く、少しでも深くたのしみたい。

たのしいことを何度もたのしめる平和、“今”という時間を大事にできる平和——〈9条〉に感謝!

みなさんのご健康をお祈り致します。

経済学部同窓会長賞の受賞者

平成29年度卒業式は、本年3月23日におこなわれました。経済学科351名、商学科250名、現代応用経済学科154名、合計755名の卒業生が誕生しました。

経済学部同窓会は、在学中勉学に励み、人物にも優れた9名に賞状と記念品(万年筆)を授与しました。受賞の誇りと自信をもって、今後は社会人として活躍されることを期待しています。

経済学科：	宮下 悠紀	松崎 由香	吉澤 星良
商学科：	畠山 楓	伊藤 駿	小田 結香
現代応用経済学科：	小宮 美恵	佐原 知樹	村井 宏紀



経済学科：宮下 悠紀 さん



経済学科：松崎 由香 さん



経済学科：吉澤 星良 さん



商学科：伊藤 駿 さん



商学科：小田 結香 さん



現代応用経済学科：小宮 美恵 さん



現代応用経済学科：佐原 知樹 さん



現代応用経済学科：村井 宏紀 さん

平成29年度 駒澤大学経済学部学生奨学論文

平成29年度で第6回を迎えた「学生奨学論文」の審査結果は下記の通りです。

【審査結果】 ※応募総数15編

1. 特選 該当者なし
2. 入選(1編) 宇都宮つき・持田美由香「子供の貧困と奨学金制度」
3. 佳作(6編)
 - ①喜多村智輝「ナチ期ドイツの経済体制ーシャハトの金融政策と日本におけるその受容ー」
 - ②伊藤 駿「第二次世界大戦期のアメリカ合衆国における女性労働者ー航空機産業にみる生産体制と『女性らしさ』ー」
 - ③川岸知史・田中夕風・川野瑞生「日本の長期停滞と現代資本主義」
 - ④嘉本貴裕・相田周平・須田あさか「英国のEU離脱と移民問題ー格差の拡大は移民問題にどのように影響したかー」
 - ⑤嵐山孝佑「中山間地域におけるメイカーズ創出モデルー静岡県浜松市天竜区春野町を事例にー」
 - ⑥櫻井真純「18世紀のネイボップ再考ーイギリスの階級社会との関係からー」

現代応用経済学科ラボラトリ研究員公募

駒澤大学経済学部現代応用経済学科ラボラトリ(通称:地域協働研究拠点)では、研究員を公募しています。詳細は、ラボホームページ (<https://www.komadaicommunitylab.com/>) をご覧ください。

経済学部のホームページがリニューアルされました!

2018年4月に経済学部のホームページ (<https://www.komazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/>) がリニューアルされました。Twitter (@KomazawaKeizai) でも情報発信を行っています。

駒澤大学大学院 商学研究科で学びませんか?

商学研究科では、2018年4月から土日や夜間開講の講義が増えました。流通・マーケティング、金融・貿易、経営、会計、租税法などについて学ぶことができ、指導教員以外の複数教員による「複数指導制」を選択できるので、充実した研究指導を受けることができます。大学院進学相談会は、2018年11月24日(土)に開催予定ですのでお話を聞きにきませんか?詳細は大学ホームページをご覧ください。

同窓会事務局からのお知らせ

同窓会組織の強化にご協力ください

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたらご紹介ください。未加入の方に事務局から入会案内をお送りします。

「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実のため原稿を募集しています。積極的なご投稿をお願いいたします。

- ・論 題：自由
- ・字 数：800字以内
- ・送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局(下記)
原稿の採否は事務局にご一任ください。

役員を募集しています

ボランティアで同窓会の仕事をしていただける方を募集しています。

軽い仕事なのでご負担になることはありません。仲間と楽しみながら、同窓会と経済学部の発展ために貢献できます。有志の方は事務局までご連絡ください。

facebookの公開グループを立ち上げました

経済学部同窓会の公開グループ(<https://www.facebook.com/groups/komakei.obog/>)を立ち上げました。同窓生の情報発信や情報交換の場としてご活用ください。

経済学部同窓会事務局(経済事務室内)

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

電話：03-3418-9343